

茂みのさなか

田中太陽

青い茂みのさなか、

つめたい目玉を隠している、瞼を踏み荒らしていった、

日差しをおれは黙認する。

セミが鳴いていて、

睡眠を返さなければならぬ。

ちつとも風いでいない茂みは、

カエルの唇が常にふやけているように、燃えている。

男にさっき押し付けられた大量の風船を、

少女はまるごと手放した。

あんた、どこか濡らしたほうがいいぜ。

白い茂みのさなか、

心筋を痺れさせている、ツバメが掠めた火の変容を見る。

塩と砂糖が似ていて、

教室が透き通ってくる、影は等しくまぶしい。

おれは肩が凝っていた、柄にもなく。

冷房がずいぶんおとなしくしている、

遠くで雲が呼吸を忘れる。

黄色い茂みのさなか、

笑いあっているのは、積極的に人を救うタイプの天使だ。

這ってくる痒さは、

夏草を刈り取ったあとの、

小学生になりたがった報いなの、かもしれない。